

《インタビュー記録》

歴史教育体験を聞く

吉田 悟 郎 先 生

日 時：2003年12月20日

2004年8月12日

2004年12月21日

場 所：東京都中野区

聞き手：鈴木正弘・三王昌代・茨木智志

はじめに

「歴史教育体験を聞く」のインタビューを吉田悟郎（よしだ ごろう）先生がお引き受けくださった。吉田先生は、学徒出陣から復員後に出版社勤務を経て、1952年から都立高校の世界史教師となられ、多くの論著を通じて、世界史そして世界史教育を追究されてきた。1981年に高校を退職された後も、その追究を継続されている。今回のインタビューでは、比較史・比較歴史教育研究会等で、吉田先生とともに学んでいる三王昌代さん（東京大学大学院博士課程）にも参加して頂いた。

以下は、吉田悟郎先生のインタビューの記録である。

1. 金沢での生い立ち

— 吉田先生の生い立ちからお聞かせください。

私は、1921年2月8日に、石川県金沢市で生まれました。生まれたのは、前田家の家老であった本多家の屋敷内の借家でした。のちに、引っ越して、下本多町の元武士の家で、育ちました。今はありませんが、隣家であった同じ形の家は、金沢の江戸村に移築されました。

父・吉田恵一は、金沢の街鉄（市電）を敷設した技師長でした。父は、福岡県の小農の息子で、東京高等工業学校（現・東京工業大学）を卒業して、日露戦争の頃に、片道切符でアメリカに渡り、苦学してスタンフォード大学電気工学部を卒業した人でした。空襲で焼ける前には、日記や卒業アルバムがありましたが、壊した自転車の弁償に苦労している様子が書かれていました。金沢街鉄で専務取締役になって、ここを辞めてからも、北陸冷凍や東洋捕鯨、飯田線の軽便鉄道の重役を勤めて引退しました。兄の友人の話では、父の所得は当時の知事よりも高額であったとのこと。暮らし向きは質素でしたが、それでも北陸の温泉やハイキングに家族で揃って何度も行きましたし、本などはどんどん買ってくれました。なんでも新しいものは買ってみる、行ってみるという父でした。クリスチャンではありませんでしたが、この頃、クリスマスもやっていました。当時、まだ珍し

かった電話が自宅にあり、小学生のときから、電話で本屋に注文書の催促をして、有名になっていたそうです。小学生のときに毎晩、家族を集めて、『モンテクリスト伯』の英訳本を読んでもらったことを、よく覚えています。父のアメリカ体験は、私にとっても、大きな影響があったと思います¹。

小学校は、石川県女子師範学校附属小学校でした。金沢の中心部にありました。タイムカプセルを埋めましたが、どうなっているのでしょうか。ただ、歴史の授業については、ほとんど記憶がありません。私の勉強は、家庭での自分の勉強が基本でした。それから文化的な雰囲気を持った金沢の環境を受けています。自宅のあった元の武家屋敷の町並みを抜けて学校に通い、兼六公園の図書館や石川神社、野田山などで遊びました。そして家では、めったやたらに本が読めました。

— どんな本を、読んでいらしたのでしょうか。

雑誌では『少年倶楽部』『子供の科学』『世界知識』などがありました。富山房の『国史総覧』がいい本で、小学生のときに愛読しました。ヴァン・ローンの『世界文明史物語』や『聖書物語』もよく覚えています。次兄は理系でしたが、文系のものにも興味を持っていましたので、内村鑑三、寺田寅彦、中勘助の本や、ファーブル昆虫記がありましたし、塚本虎二の無教会主義の雑誌（『聖書の知識』）も取っていました。また小学生の頃から、次兄が見つけていない文庫をわざわざ買っていました。今から思えば、次兄への対抗意識だったようですが、ちょうど岩波文庫の出始めで、バーナード・ショーの『人と超人—メトセラ時代へ帰れ』などを見つけて読みました。また、小学生全集（興文社）や日本児童文庫（アルス）が出揃っていた時期でしたので、全部、読みました。いいものでした。大人のもの、改造社の現代日本文学全集や世界大衆文学全集を読みました。坪内逍遙訳のシェークスピア（『新修シェークスピア全集』中央公論社）は自分で注文して取りました。

音楽を聴くことも、古典派、ローマン派の音楽を兄から学びました。また、映画が好きで、よく見にいきました。洋画は、金沢にはあまり来ませんでしたが、ロイドやチャップリン、「フーマンチュウ博士の秘密」シリーズ、キングコング、ミッキーマウス、ターザンなどを見ました。

2. 中学から高校へ

— 中学生のときのことをお聞かせください。その中で、歴史の授業はどのようなものだったのでしょうか。

1933年に石川県立金沢第一中学校（現・県立金沢泉丘高校）に入学しましたが、翌年、中学2年になるときに、一家をあげて東京に移ります。私は、東京府立第五中学校（現・都立小石川高校・中等教育学校）に転入しました。ちょうど入れ違いで、1年間だけですが、アメリカに行く前の鶴見俊輔氏が、府立五中に在学し

¹ 吉田氏の幼い頃のことは、未完ながら、「体験的世界史遍歴抄—アメリカとの出会い—」として『歴史地理教育』251号（1976年）から267号（1977年）にかけて述べられている。

ていたようです。住まいは、本郷区西片町（現・文京区）にありました。のちに下北沢（現・世田谷区）に転居し、戦争中に東松原（同前）に移りますが、ここで空襲に遭うことになります。

中学校では、西洋史と東洋史の授業が面白かったですね。ただ、自分自身の歴史学習に関して言えば、授業はごく一部のものでした。これまでもお話したように、学校の授業だけから歴史学習のことは見るのは方法として問題があります。私の歴史学習にとって、重要なのは、何と言っても、読書、映画、音楽、芝居、地図でした。

早稲田、本郷、神田の古本屋通いも、随分しました。中学から高校にかけては、岩波文庫、改造文庫、弘文堂世界文庫などの文庫を乱読し、日本と西洋の文学者の全集や戯曲の全集を収集しました。

ディヴィエの「にんじん」を見て以来、洋画に取り付かれました。プログラムも集めました。映画雑誌の『スタア』（スタア社）というのがあり、バックナンバーも含めて集めました。そういえば、兄に雑誌やプログラムの山を見つけれられて冷やかされたことがありました。外国映画をよく上映していた帝国劇場に、回数券を持って、通いつめました。本郷座の夜間割引きにも、こっそり出掛けました。当然ながら、映画の見すぎで、中学では成績が下がりました。

芝居では、島崎藤村の『夜明け前』が村山知義の脚色でありました。ゴリキーの「どん底」の感動以来、新協劇団、築地小劇場の芝居にも通いました。

音楽も、たくさんのレコードを集めました。東京に来てからは、日本フィルハーモニーの定期演奏の会員になっていました。チャリャピンが日本に来たとき（1936年）も切符を買って聞きました。また、諏訪根自子のファンになりました。

これが学校の勉強以上に、いい勉強になりました。

— 中学校生活で、印象に残っていることをお聞かせください。

中学3～4年の頃に、クラスで、ウィークリーめいた印刷物を出していました。このころ、中学に校外補導部ができました。私は、補導部とは書かないで、「五月の森に徘徊する怪物が出てきた」という短文を、ペンネームで書きました。これが職員会議で問題になったそうです。担任の先生は、東大文学部を出たばかりであった新任の国語の先生でしたが、ずいぶん守ってくださったようです。私が途中で高校に行った後も、このウィークリーは出されていましたが、友人たちは日華事変の批判を書いたそうです。これも配属将校を中心に、大変な非難を受けたのに、担任の先生の努力により処罰者は出なかったと聞きました。

— 高等学校での生活はどのようなものだったのでしょうか。

次兄が中学4年で、一高（第一高等学校、現・東京大学教養学部）に楽々と合格した²のに対抗して、私も4年生のときに一高を受けて、不合格でした。5年卒業

² 当時の中学校（旧制）は5年制であったが、4年修了時に高等学校（旧制、3年制）を受験して入学することができた。

時に再び受験すればいいと周りから色々と言われましたが、私は4年修了時に、私立の成城高校（旧制、現・成城大学）文科乙類に入学しました。1937年のことです。ここで、他の高校では味わえないような高校生活を送ることができました。

成城高校の新聞部は、『成城学園時報』という、少し左翼的な新聞を出していました。私は入学して早速、無教会主義の立場から、日中戦争に対する厭戦・反戦的な文を書いて、投稿しました。これが教授会で問題となり、私は新聞部入部禁止、執筆停止の処分を受けました。そのため、その後は〈秘密部員〉として参加し、匿名で執筆することになりました。卒業間際になって、文芸部の雑誌であった『城』には書いてもよろしい、ということになりましたので、ロシアのプーシキンとレーエルモントフという詩人たちの非業の死を題材に、「詩人の死」という小説を書きました。ロシアのツァーリズム弾劾に、日本の軍国主義弾劾を重ねたつもりでしたが、文芸部部長のニーチェ研究者の阿部六郎氏により「危険思想に満ち満ちている」と言われ、掲載されませんでした。『成城学園時報』の方には、レーエルモントフの詩をドイツ語から重訳しまして、卒業間際に吉田悟郎の名で載りました。新聞部の先輩であった澤田雄二氏のサロンが、渋谷宮益坂にあり、そこで、エドガー・スノーやアグネス・スメドレーの『中国の赤い星』や『紅軍は前進する』を見ました。当時、輸入禁止になっていた洋書です。

成城高校には、西洋史の尾鍋輝彦氏がいました。ボチヤロフ、ヨアニシアニ共著の『唯物史観世界史教程』（白楊社）という本があり、初版から何版も出て、仕舞いには検閲で伏字だらけのものでした。この5冊が、最新のソ連の唯物史観の決定版でした。これも使ったガリ版刷りが、テキストとして配られての授業でした。このようなものを使う自由は当時ありました。と言うよりも、ここまで目が配られていなかったのかもしれませんが。尾鍋氏は新聞部の部長でもありました。新聞部の部長としては保身が8割、学生を守る気持ち2割という感じでしょうか。新聞部への検閲はひどいものでした。例えば、「批判」という文字がある時期からだめになり、すべて「批評」に改めさせられました。岩波書店の社長になった岩波雄二郎氏も、新聞部員でしたが、三木清の本を推薦して、厳しく責任を問われました。授業等で色々な刺激を頂いた尾鍋氏ですが、新聞部としては、当時、反発する気持ちが強かったのが正直なところでした。新聞部には、敗戦までを記録した『秘密日誌』がありました。今日は、コピーを持ってきました。新聞部は、軍国主義化で他の部と同様に最後はすべて解体されて、報国会のようなものになりました。

当時、特に、野間宏の『暗い絵』や、魯迅が編纂した中国版面に刺激を受けました。美術雑誌の『アトリエ』、『みづゑ』も愛読書でした。また、ブリューゲルが新聞部仲間の共通話題になっていました。

— 吉田先生の歴史学習において、文学や芸術は大きな位置を占めると存じますが、特に、文学と歴史はどのような関係にあるのでしょうか。

歴史の中で生きていく人々の心とか、興味とか、関心とかを、文学は扱わざるを得ません。書いてあることがすべて本当のことというわけではありませんが、

そういう気配り、心配りが文学だと思います。歴史的な史料に書かれていることのみでは、真実は分かりません。そういう意味で文学に触れることは、歴史の研究にとっても大切ですね。

3. 大学そして軍隊での学習

— 大学から学徒出陣されたと同っていますが、その間の状況をお聞かせください。

1940年に東京帝国大学文学部の独逸^{ドイツ}文学科に入学しましたが、2年目にナチス文学一辺倒のドイツ文学に嫌気が差しまして、3階にあったドイツ文学から、よりリベラルを残していた1階にあった西洋史学科に移りました。

大学の講義は、面白いものではありませんでした。これは、当時の大学生に共通する感想だと思います。西洋史学科には今井登志喜氏、山中謙二氏たちが教師としていましたが、自分の勉強としては、大学ではなくて、歴研（歴史学研究会）でした。当時、石母田正、藤間生大、松本新八郎、林基、高橋幸八郎、林健太郎などの諸氏が参加していました。当時の雑誌では、『近代文学』『現代文学』が出ていました。河出書房の『世界歴史』もありました。羽仁五郎『ミケルアンジェロ』（岩波新書）には、すごく影響を受けました。日本歴史全書（三笠書房）には、高橋碩一氏が『洋学論』を書いていました。発行禁止になっていた本も探して持っていました。『日本資本主義発達史講座』（岩波書店）は、場末の古本屋で見つけました。ミーチン、ラズモフスキーの『史的唯物論』、『弁証法的唯物論』（ナウカ社）、岩波書店の『日本資本主義分析』（山田盛太郎）、『日本資本主義社会の機構』（平野義太郎）、唯物論全書（三笠書房）などもありました。

1941年に繰り上げ卒業が始まりまして、1942年9月に、2回目の繰り上げ卒業で私も卒業させられて、学徒出陣となりました。ですから、西洋史学科には1年半しか、いらませんでした。卒業論文は「ヘルデルリンにおけるドイツ的近代性³」でした。

— 軍隊での生活は、どのようなものだったのでしょうか。

私の軍隊生活は、学習の面からは比較的、恵まれていました。1942年、近衛師団第一歩兵連隊重機関銃中隊に、二等兵として入隊したときから始まり、1945年の敗戦で復員するまで続きました。成城高校新聞部の先輩であり、優れた歴史教師だった小松良郎氏は、私と同じく近衛師団にいましたが、中隊で Kommunismus の読書会をやったという嫌疑で軍法会議にかかり、しばらく軍事刑務所にいた厳しい経験をお持ちです。私の場合は、このような経験はありませんでした。学生意識が抜けず、レクラム文庫のレールモントフのドイツ語訳の詩集を持って入隊

³ 卒業論文に関する発表が、『歴史学研究』105号（1942年）の「会報」に「西洋史部会九月例会」として紹介されている。吉田悟郎「私の卒業論文（30）詩人—ドイツ—世界 ヘルデルリンにおけるドイツ的近代性」（『季刊歴史教育研究』48号、1969年）に詳しい。

し、軍隊手帳に詩人の詩を記していました。機密書類であった野坂参三の『日本人民に告ぐ』を持ち出して、渋谷の澤田雄二氏のサロンで見せたこともありました。

入隊後、訓練期間中に盲腸炎での入院、さらに父と府立六中 1 年生の弟が相次いで亡くなる不幸がありました。このような中で私は、甲幹（甲種幹部候補）を落ちまして、下士官にしかねない乙幹（乙種幹部候補）になりました。その後、近衛師団司令部に情報班というものが新設されました。戦争の激化に伴い、空襲その他に備えた情報を発信する、いわば新聞班です。東大仏文出身で共同通信の記者だった長与道夫少尉が班長、それに軍曹だった私、毎日新聞の記者だった吉田伍長、そして慰問の映画を見せに行ったりもしましたので、映写技師がいて、合計 4 人が情報班のメンバーでした。何をやるという命令もなく、自分たちで考えることになりました。防空情報だけでは面白くないので、国内の治安情報を含めて、月 2 回、師団の隷下部隊に向けて発行しました。

色々な所から必要な情報を集め、情報班の原稿ができると、師団司令部の打字（タイプライター）室に届けます。このとき打字業務を担当していた女性が、妻です。ここに当時の〈往復書簡〉がありますが、これはまだ〈門外不出〉です（笑）。結婚のことを長与少尉に相談したところ、人情のある方で、通常ならば許されないところを、戦地に行くのならばという条件で許可を取り付けてくれました。そのため私は、全国からの選りすぐりの部隊であった近衛師団から、いわば〈ならず者〉の部隊である東京船舶隊に移ることになりました。これは、本土決戦に備えて、伊豆七島から関東を担当する陸軍の新しい部隊でした。部隊の雰囲気は全く違いました。ある意味で、島流しでした。船舶隊の司令部は芝にあり、その情報班に配属されました。班員は将校と私の二人だけでした。

戦況が厳しくなり、東京も 3 月 10 日と 5 月 25 日に、2 度の大きな空襲を受けました。5 月の空襲では、東松原にあった私の家が焼けました。空襲後に許可を得て、実家に行ったところ、何もなくなっていました。灰すらありませんでした。長年、私が集めていた本やレコードのすべてを失いました。その後、東京空襲で焼けた司令部が移った横浜でも、5 月 29 日に空襲を受けましたが、これもひどいものでした。空襲の体験は戦場の体験と同じで、実にいやなものです。「終戦」の放送は横浜で聞きました。司令部は芝浦埠頭に移って、しばらく部隊の解散などの処理をしました。

4. 敗戦から出版社勤務

— 敗戦後は、どうされていたのでしょうか。

復員したのち、1945 年の秋から半年ほど、丸の内郵便局 2 階の GHQ（総司令部）の CID（民間諜報課）で国内郵便検閲のため CCD（民間検閲支隊）としてアルバイトをしました。差し出された郵便を読んで、物価の問題とか、軍隊のこととか、何かの陰謀とか、をチェックして翻訳するという仕事でした。チェックをすると判子を押しました。仕事の内容はこのようなものでしたが、ここに集まったデスク仲間の開放的な雰囲気が、大変に面白いものでした。ただ、担当の日系

二世たちは、実に威張った感じの人々でした。

この検閲の体験や1946年の戦後最初のメーデー、印刷出版労働組合の支部として参加した2・1ゼネスト、その後のレッドパージなどを通じて、アメリカ軍は決して〈解放軍〉ではないということを様々な形で実感しました。このような経験が、私自身の公式主義や法則主義への懐疑と批判につながっていると思います。

そして京橋にあった日本評論社出版部に入り、編集者となりました。ここに勤めていた西洋史の先輩である村瀬興雄氏が、松山高校（現・愛媛大学）に移ることになり、後任として推薦されての就職でした。

編集者としての最初の仕事は、ロバート・オーエンの『自叙伝』（本位田祥男・五島茂共訳）で、田中正造の『晩年の日記』（明治文化叢書）を手がけました。さらに岩波文庫の向こうを張って、世界古典文庫の刊行を始めて、その編集主任となりました。ウエイクフィールドの『イギリスとアメリカ』（中野正訳）、ゲルツェンの『過去と思索』（金子幸彦訳）などは評判になりました。私自身が面白くて発行したのが、ボッカチオの『デカメロン』（柏熊達生訳）でした。他にも、コンパニーの『白黒年代記』（杉浦明平訳）、ギゾーの『ヨーロッパ文明史』（安土正夫訳）、ミシュレー『フランス革命史』（後藤達雄他訳）、ディッケンズの『デヴィッド・カッパフィールド』（平田禿木訳、島田謹二校訂）、ヴォルテールの『イギリス便り』（川西良三訳）など、どれも深く印象に残っています。ただ、紙の質をはじめ、出版の事情は劣悪でしたが。それから、小此木真三郎氏が戦争中に訳していたホーマア・レインの『親と教師に語る一子供の世界とその導きかたー』を出しました。ベストセラーになった、この本に影響を受けまして、『新しい育児百科』（羽仁説子、松田道雄共編）を企画しました。

また、高橋碩一・松島栄一・宮森繁の『日本の国ができるまで一目で見る日本史一』があります。分かりやすく絵解きを入れた日本史の本は初めてでした。この本は、毎日出版文化賞をもらいました⁴。科学、数学に関するよい本を著したホグベンが監修して、絵解き人類史という本が、戦後にイギリスで出されました。これがとても客観的で合理的な絵解きで、大変に面白いので、私が翻訳して3巻本で出しました⁵。明星学園では、テキストにしたと聞いています。この翻訳が『日本の国ができるまで』の背景にありました。評判になりましたので、世界史版を作ろうということで、理系の編集者だった鎮目氏と私が書いたのが『地球と人類が生れるまで一目で見る世界史一』（山口清三郎他編）です。その後、続編を発行する予定でしたが、会社により何度か社員の首切りも行われ、この企画は頓挫してしまいました。

レッドパージと言ってもいいような不当な首切りはひどいものでした。GHQから社長に直接の圧力がありまして、私の先輩・同僚が次々と解雇されていきました。

⁴『名著の履歴書—80人編集者の回想—』（日本エディタースクール出版部、1971年）に『日本の国ができるまで』のことが掲載されている。

⁵ランスロット・ホグベン監修、オットー・ノイラート、マリー・ノイラート、J. A. ロウエリイ著（上原専祿他監訳）『絵とき人類史』全3巻、日本評論社、1950年。第1巻は「大昔の生活」、第2巻は「村の生活・都市の生活」、第3巻は「世界をつなぐ生活」。

私も嫌気がさして、1951年に病気という理由をつけて日本評論社を辞めました。間もなく、この日本評論社は倒産しました。今の日本評論社は新しい会社です。

その後、数人で、教育文化研究所という名前で、自分たちで出版事業を起そうとしました。しかし編集者だけでは、出版はできませんでした。資金調達をしなければなりませんし、何よりも営業が必要です。結局、うまく行きませんでした。また、名古屋大学へのお誘いも受けましたが、家庭の事情で東京を離れるわけにも行かず、お断りしました。

5. 都立高校の世界史教師

— そのあとで、高校で世界史を担当されたわけですね。当時の授業の様子を含めて、お聞かせください。

最終的には五中の恩師から、新しくできる東京都立広尾高校（東京都渋谷区）の社会科の教師になるようにお誘いを受けて、腰を落ち着けることになりました。1952年のことです。1981年に定年で退職するまで、広尾高校に勤務しました。「でも教師」として教師になりました。「しか教師」の要素も、少し、ありました。

ここで〈世界史の海〉にぶつかることになります。高校の世界史教師ではなく、大学の教師になっていたら、世界史などという危なっかしいことに取り組むことは、なかったでしょうね。今から考えると大事な転機でした。

始めの世界史の授業のときに、広尾高校の屋上に生徒を連れて行って、「これから始まる世界史の授業は、この地域から始まる。あそこの通学路を下りていくと、庚申塚がある。そして、あそこに板碑がある。あそこに、中国人の女性留学生が入学した実践女学校がある。自分は、この広尾という地域から世界史を見ていくことをやりたい。自分だけが話すような授業はしない。黒板には字を書かないし、年号とか暗記とか無視した授業をする。ノートも別に取らなくてもいい。みんなで勉強していこう」と言ってしまいました。出来るわけもなかったのですが、この言葉から始まりました。

この当時、ガリ版で刊行した新聞を持ってきました。『ぼくらの世界史教室 仮称 第1号』（1953年4月24日）です。「創刊にあたって」には、「今年は、ぼくが一人でべらべら喋ってしまうような授業はしない。日本人のみんなに、縁もゆかりのないような世界史の授業はしない。…これから1年間の社会科の目標を、みんなの生活、今日の問題と結びつけた社会科世界史、一般社会に置きたい」と断言しております。これも〈3号雑誌〉で終わってしまいましたし、大きなことを言ってしまいました。こういうことを言ってから、上原専禄氏とぶつかります。

6. 〈上原専禄ゼミ〉への参加

— 吉田先生は、1956年に発行された上原専禄監修『高校世界史』（実教出版）の執筆者の一人ですが、その編集は、どのようなものだったのでしょうか。

1952年に「でも教師」で都立高校の教師になりましたが、同時に、歴教協（歴史教育者協議会）の活動に参加するようになりました。歴教協はこれより数年前

に作られて活動が始まっていました。私も教師になる前から付き合いがありましたが、教師になってからは、委員になったり、委員会に出たりと本格的に参加するようになりました。また、社会科の人たちは非常に民主的で、しかも勉強が出来る人が多かったこともあり、私も刺激を受けて、教師になってすぐに、教員の学習活動や組合運動に参加し始めました。他にも、武蔵野児童文化研究会という郷土教育の活動がありました。これにも、興味を持って参加して、自分の授業に影響を受けました。

1952 年の春に始められた実教出版の〈上原世界史〉の編集⁶は、上原専禄、野原四郎、江口朴郎、西嶋定生、太田秀通の各氏による 5 人で始まりました。そこに、現場の世界史教師を入れなければならないということで、西洋史の私が参加することになりました。さらに東洋史の都立本所高校にいた久坂三郎氏が加わって、〈七人の侍〉となりました。現在、生き残っているのは、一番出来の悪かった私だけです（笑）。

西嶋氏が歴教協の高校部会で世界史案を発表したのが、上原氏に徹底的にたたかれました。この発表は、私も聞きましたが、ここから教科書編集が始まりました。西嶋氏はこれを「八年間のゼミナール」と回想しています⁷。教科書の編集のために集まっていたはずですが、小手先の文章を作るような作業はせず、ほとんどが根本的で、基本的なことに対する議論でした。大変に面白いものでした。毎月 1 回以上、議論は 4～5 時間以上、行いました。普段は、実教出版の会議室に集まり、夏には、北軽井沢で合宿をしたこともありました。教科書原稿の検討から始まりますが、議論は、どんどん掘り下げられ、「ロマンティック（Romantik）とは何か」、「ヘルダーリン（Friedrich Hölderlin）とは何か」というようなテーマから、世界史の基本構成のテーマに及んでいました。この教科書の執筆は、野原・江口・西嶋・太田の 4 氏が主に担当しています。挿絵や図版の選定は、主として私が担当しました。もちろん、長く共に議論してきたものですので、共同責任を負う著作です。「世界史を学ぶにあたって」についての項目は、上原氏が一人で執筆しています。あのような文章は、他の人には書けない、深い内容です。野原・江口・西嶋・太田の 4 氏は、上原氏から大きな影響を受けたと思います。〈江口世界史〉の背景に、〈上原世界史〉があることがまだ気付かれておりませんね。

また別に、指導書がありましたが、これは私と久坂氏がすべて書きました。そういう意味では、この教科書と指導書は異なるものです。今から見れば、唯物史観とアカデミズムの経済史観が混在したような感じの本です。私には上原氏の考える世界史どおりの指導書は書きえませんでした。ただ、ここで私は、歴史の表面に現われた地域以外は無人であるとか、歴史がないように思わせてはならないと書きました。今の私の言葉に直せば、意味のある差異性・多様性が、地球の隅々

⁶ このときの編集作業により、上原専禄監修『高校世界史』（実教出版、1956 年検定）が発行された。その後、1956 年の学習指導要領改訂に対応して再執筆された原稿は、1957 年、1958 年の二度にわたる検定不合格を受ける。そのため岩波書店から一般書として発行された（上原専禄編『日本国民の世界史』岩波書店、1960 年）。この間の経緯は、同書の「まえがき」に詳しく記されている。

⁷ 西嶋定生「八年間のゼミナール」『図書』133 号、岩波書店、1960 年。

に存在しているという主張です。鈴木亮氏は、スポットの当たらないところに歴史があると、実に上手に言い換えてくれました。ただし、この主張は、その後の歴史教育の中で十分に生かされたとは言えませんね。

この教科書は、のちに、検定で落とされることになりますが、このときの検定については、社会党の代議士がまとめたものがあります⁸。これらの体験は、世界史認識に関する私の歴史学習、歴史教育、歴史研究の基盤になっています。

— 上原専禄氏とは、その後もお仕事をされたのでしょうか。

これ以来、上原氏とは「八年間のゼミナール」というだけではなく、学問的な方面でのお付き合いが始まりました。『岩波小辞典世界史 西洋⁹』では、上原氏から指名されて私が執筆を手伝いました。この辞典は、各国史で成り立っています。上原氏は「西洋」という枠組みを否定していますので、岩波書店の企画に妥協して、このようになりました。そのため西洋編の名の下で、中南米諸国やトルコをわざわざ入れています。中でもトルコ史の分量は多かったと思いますが、それは「西洋」「東洋」という区別は出来ない、存在しないということを実際に示すための意図的なものでした。

他に子ども向けの本でも上原氏とのお付き合いがありました。私は生来、ビジュアルなものが好きで、出版社にいた頃から手がけていましたが、教師になってからも、画家と一緒にあって、いくつか、作り続けました¹⁰。そういうときに上原氏に監修者をお願いしたりしまして、別な形でのお付き合いが続きました。

上原専禄氏の世界史に対する検討は、誰かに、時間をかけて本格的に進めて頂きたいと考えています。鈴木亮氏が生前に作成したホームページ（後述）には、〈上原世界史〉に至る道程が出て来ていました。しかし、〈上原世界史〉が、歴教協とも、歴研とも、何ゆえに違ったのかという点がはっきり解明されていません。これに取り組まないと、〈上原世界史〉は局部的なものに終わる恐れがあります。かつて、歴科協（歴史科学協議会）のシンポジウムに呼ばれて、私がいわば〈上原世界史〉の代理人のような立場で報告し、議論したことがありました¹¹。その内容を見れば、分かりますが、明らかに食い違っています。私も、この頃から違いを意識して発言するようになりました。成瀬治氏は、好著『世界史の意識と理論』（岩波書店、1977年）で、いわば中立公正の立場から、歴史学習者・歴史教育者といわゆる既成の歴史研究者との食い違いを示しています。歴教協の中でも、生活主義と科学主義という形で、この違いを論点にしてくれている人はいます。ただし、解明されているとは言えません。

⁸ 加瀬完『教科書検定—いわゆる加瀬メモをめぐる—』誠真書房、1960年。

⁹ 上原専禄・江口朴郎編『岩波小辞典世界史 西洋』岩波書店、1964年。

¹⁰ 上原専禄監修『社会科図解事典 第2巻 日本と世界の歴史』平凡社、1957年。

¹¹ 「シンポジウム5 世界史把握の方法をめぐる 吉田悟郎報告」（歴史科学協議会編『現代を生きる歴史科学 第3巻〈方法と視座の探求〉』大月書店、1987年。

7. 世界史への取り組み

— 吉田先生の世界史への取り組みについて、お話しください。

私の世界史への取り組みは、公式的で法則的な見方への懐疑と批判に終始しています。この懐疑と批判の対象には、私自身も含まれます。

高橋磯一氏が1953年の歴教協の第5回全国大会（京都・立命館大学）で「歴史的なものの見方をどう育てるか」という提案をしました。それは、小学校1・2年で、ものごとを具体的に見させ、ものごとを比べて見させる。3・4年で、ものごとは変わる、変えることができることを分からせ、変わるには法則があるということをつかませる。5・6年で、変えるのは我々であり、我々がものごとを開発すれば、摩擦が起こる。だからこれと戦わねばならない、という系統的歴史教育の主張でした。これが歴教協全体の提案になります。私は、この提案に最初から引っかかりを感じていました。なぜかという、私自身の素地と上原氏の影響があったためです。このときの歴教協の提案では、教師が普遍的永遠的な歴史意識・歴史認識に依拠した上で、理解や発達の度合いに応じて、伝達注入していくことができるし、それが正しいという感覚を持っています。しかし私は、これは現代が要請する歴史意識、現代にふさわしい歴史意識ではないと感じました。

— 具体的には、どのような歴史意識をお考えだったのでしょうか。

私が考える歴史意識は、それだけ切り離して存在するものではなく、歴史的現実の中に生き、様々な生活経験や問題意識を生起変化させつつある個々人の中に存在しており、いわば特定の問題状況の中での生活経験や問題意識、生活意識を基礎にして、そこから出てくる意識が歴史意識であるというものです。歴史意識の自主的形成として、その深化、豊富化、多様化することが、逆に問題意識や生活意識を深め、修正を加えたり、生活経験を発展させたりしていく、主体的な状況を作るものです。したがって、歴史意識・歴史認識の定型とか理想型ではなく、具体的、特殊的、民族的な生活現実と問題状況の上に立って、我々日本人の独立的、個性的な問題意識や生活意識、それに媒介された独立的、個性的な歴史意識を常に生き生きとした形で作り出し、保持し、発展させていかなければならないと批判しました。高橋氏もその後、法則をつかむことは大事ではあるが、出来合いの歴史があるような歴史家としての思い上がりがなかったかと自己批判をされています。

この1953年の歴教協大会の高大（高校・大学）部会で、教師になって2年目の私は、世界史教育に関して、初めての意見表明をしました。この中で、歴史教育は、最初から世界の中で日本はじめ諸民族の歴史を全面的に発展的にとらえること、植民地従属国の歴史を重要視すること、近代日本が一面従属、一面侵略という歪んだ道を歩んだことをはっきりと浮き彫りにすること、そこから脱却するには東欧、アジア・アフリカ、中南米とのつながりの上で歴史的に自覚する必要があること、などを主張しました。そして、このような歴史教育を通じて初めて、今日の国民的危機の自覚と克服を妨げている支配者根性、植民地保有国家の精神

を脱却できると述べました。また、西洋中心の見方でない東洋と西洋の絡み合いや有機的關係をつかむべきであり、科学的歴史教育とは一体、何であるのかを検討すべきであるとも強調しました¹²。これは未整理ながらも、懷疑や批判の始まりでした。今、読むと、口先だけの言葉や、自分自身の公式的で法則的な理解や、ソ連の世界史叙述の影響が見て取れます。しかし、未だに解決できていないことが盛り込まれています。

— ここで主張された「科学的歴史教育」への懷疑は、上原氏の主張とどのように関わりますか。

もちろん、上原氏が科学的歴史教育を主張していたわけではありません。上原氏は、歴史学が科学として成立しているか否かを疑問視し、かつ、自制していたと思います。ここでいう科学とか法則というのは、ご存知の通り、マルクス主義や唯物史観の話です。ここでの私の懷疑の対象は、高橋氏そして歴教協の主流派の考え方です。当時は、公式主義や法則主義に疑問を述べること自体が胡散臭い目で見られたものです。

私が書いた最初の世界史に関する論文は、世界史講座の中の「ものの見方、考え方を深めるために¹³」です。この論文で、私がはじめに引用したのは、上原氏の主張した「歴史教育の目標¹⁴」でした。上原氏は、世界と日本にわたる歴史像の自主的構成への態度を育て上げるという方法を通じて、子どもたちに歴史意識と歴史的自覚を備えさせる歴史教育が、ほとんど行なわれてきておらず、逆に、たかだか歴史意識の伝達に過ぎなかったのではないかと問題提起をしました。また、別な文章（「ものの見方、考え方¹⁵」）で上原氏は、今の日本には、ものを考えるゆとりを失っている人や、考える興味を失っている人が大勢あること、そのため、何とかして、ものを考えるゆとりや興味を取り戻し、是非とも粘り強く考えていくべきことを主張しています。そして、日本人の考え方の弱点を出発点として、これまで独りで考えてきたものを周囲の人さらには、もっと多くの人々と行動しながら共に考えていくことの重要性、その中で事物を社会的、歴史的に、さらには動的に考えていくことの重要性、自分の価値観のみではなく個性ある独得な存在として相対的に考えていくことの重要性の三点を指摘していました。

私は社会科や歴史の最初の授業で、このことを必ず黒板に書きながら始めました。卒業生の中にも、この授業が印象深く頭に残っていると語る人が多いですね。この「ものの見方、考え方」は、先ほど紹介した高橋氏の主張とは全く異なるものです。見方、考え方に関連した様々な主張は、最近でも行なわれていますが、あまりに難しすぎるのではないかと思います。あれでは、とても広まりません。

¹² このときの報告は「歴教協第五回大会要記」として『新しい歴史教育』2号（1954年）に記録されている。

¹³ 吉田悟郎「ものの見方、考え方を深めるために—世界史の同時代的・全面的とらえ方というひとつの仮説—」（尾鍋輝彦他監修『世界史講座 VIII』東洋経済新報社、1956年）。

¹⁴ 上原専禄「歴史教育の目標」（『歴史地理教育』創刊号、1954年）。

¹⁵ 「ものの見方、考え方」（上原専禄『アジア人のこころ：現代への省察』理論社、1955年）。

ただ、現在の私自身も、この「ものの見方」を十分にこなしているとは言えません。

それから、歴史認識について、上原氏から、追々、学んだことを付け加えます。歴史認識というのは、たびたび言われたり、論じられたりしていますが、日本では因果認識に偏っています。この因果認識だけではだめで、機能・作用認識（機能認識と言ってもいいでしょう）と意味認識との3つが揃わなければ、ちゃんとした歴史認識とは言えません。

— 歴史認識について、もう少しご説明ください。

機能と作用というのは、事実が誰によって、どういうふうに機能したか、どこに作用したかの認識です。これは、難しいですよ。今もよく考えられていません。そして、意味認識というのは、その事実が誰にとってどういう意味を持ったのか、すなわち、その時代の人々、同時に、後世の人々、今の我々に過去の事実がどういう意味を持っているのかという認識です。全部、今の我々と比べ、今の我々に過去の事実がどういうふうに機能しているのか、作用しているのか、そして誰にとってか、を考えるべきであるというものです。因果認識だけでは、認識として浅いものであり、歴史学と歴史教育は、因果認識と機能・作用認識、意味認識の3つが揃わなければならないというものです。

実現はとても難しいものです。私自身もよく消化できておりませんが、上原氏から何度も提示されまして、消化できないながらも、その重要性を自覚しました。上原氏の活動に対する研究も、最近は出てきているようですが、とても大変な〈巨大な山脈〉^{やまなみ}ですね。〈巨大な山脈〉であることに、気付かれてすらいらない状況だと思います。

8. 世界史への取り組み（続き）

— その後の世界史への取り組みについて、教えてください。

その後、1960年代にかけて、世界史発展の法則を公式ではなく、未定型のかたちで探っていくことで、歴史意識の自立を求めていくことを主張し¹⁶、アンケートで歴史意識の実態を分析し¹⁷、さらに東アジアを正面に据えて、生活意識に即することで科学主義に対する見直しを提起¹⁸していきました。あとでも触れますが、「東アジア」という用語は、今の自分には使いたくない言葉です。一方で、吉

¹⁶ 吉田悟郎「歴史意識の自立を求めて—世界史・日本史の統一的把握を考えるに至るまで—」『歴史地理教育』29号、1957年。同「歴史教育」『歴史学研究』213号、1957年。

¹⁷ 吉田悟郎「歴史意識の実態についての一資料」（小学校入学前から高校段階まで）『歴史地理教育』75～77・79～81号、1962～1963年。

¹⁸ 吉田悟郎「社会認識・歴史意識をどう育てるか—東アジア世界を研究・実践の正面に—」『歴史地理教育』75号、1962年。また、1962年8月の歴史教育者協議会全国大会での発表、1963年5月の歴史学研究会大会での発表でも問題提起がなされた。

岡力氏が自宅に歴史教育研究所を 1954 年に開設しました。渋谷の駒場東大の裏にあった、ここが、当時の私のホーム・グラウンドになりました。私にとっては、いわば〈世界史研究所〉です。この研究所の研究会や『季刊歴史教育研究¹⁹』を通じて、重要な議論や世界史の提案をしていくことになりました。

1963 年 12 月から、上原氏による 5 回の「世界史学習会」を聴講しました。吉祥寺にあった上原氏の自宅の書斎である「芸文学堂」で行なわれたものです。とても難しいものでした。さらに、自分自身にとって、役に立った勉強が 1964 年 1 月から 4 月にかけて 4 回にわたって、国民教育研究所で上原氏を中心に行なわれた高校世界史教育の研究会でした²⁰。特に印象に残っているのは、私が〈ひっくり返し〉という言葉を使って、実践の課題や問題を出したのですが、上原氏がそれを受け止めてくれたことです。他にも私は、〈民族の実感、階級の実感〉という言葉を使って議論をしました。上原氏は〈忘れ残し・歩どまり〉という言葉で、歴史教育の問題を取り上げました。これらは認識の上でも、学習の上でも、研究の上でも重要な問題であると思います。

— 〈忘れ残し・歩どまり〉とは、どういうものですか。

〈忘れ残し・歩どまり〉の問題というのは、あとの印象に残る、記憶に残ることがありますよね。社会科だとか、歴史だとかは、「暗記物」化して、試験の後に忘れるのが当然です。忘れる方が健康です。では、忘れ残して、残ったのは何か。もちろん年号ではだめですよ。前にも触れた上原氏の言っていた、ものの見方・考え方というようなものとなるべきです。将棋の用語から取った〈歩どまり〉も、意味としては同じです。しかし、教科書の世界史の〈歩どまり〉がどこにあるかと考えると、嘆かわしい限りですね。私は現在も含めて、〈ひっくり返し〉を続けていくことになります。あちこちで主張したものですから、歴教協にいらした佐藤伸雄氏からは、「悟郎ちゃんは、ひっくり返し屋だ」なんて言われています。ただ、何をどのように〈ひっくり返し〉していくかをよく吟味しませんと、〈ひっくり返し〉そのものが公式化してしまいます。そして、歴史研究も、歴史教育も、自分自身も、権威化してしまったら、〈ひっくり返し〉をする必要があります。

それから、1965 年と 66 年に、岩波市民講座で、上原氏の講演がありました。「日蓮とその時代—世界史認識の意味と方法によせて—」と「モンゴル人の『世界征服』と 13 世紀ユーラフロアジア世界—日蓮認識の意味と方法によせて—」です。ここに〈ユーラフロアジア〉という造語が出ています。ヨーロッパとアジアをあわせて、ユーラシアと言い、これにアフリカをあわせて、アフリカン・ユーラシアという言葉を使うのが、ヨーロッパ人やアメリカ人です。取ってつけたようなこの言葉では、だめなのですね。アフリカとヨーロッパとアジアの切っても

¹⁹ 『(季刊) 歴史教育研究』は 1956 年 9 月に創刊され、2002 年 3 月に 80 号をもって終刊となった。

²⁰ 「高校世界史教育をめぐる」(『国民教育研究』22・23 号、1964 年) に収録されている。

切れない関係を、ユーラシアの間にアフリカを入れて、ユーラフロアジアという言葉で表現しています。〈ひっくり返し〉がなされた良い言葉だと思って、私も使うようになり、だんだん消化して来ています。特に現在はまさに、このようになっていますね。13 世紀世界史起点論も出ていますが、詳しくは省略します。また 13 地域論も出ています。13 世紀にせよ、13 地域にせよ、13 という数字にこだわる必要はないと思います。

その後、「世界史の可能性」について問題提起をしたり²¹、これまでの自分の主張を 2 冊の本にまとめたりしました²²。このころから、沖縄、韓国、台湾、南ベトナムを認識対象に組み込む必要性を強調し始めました。実現は、なかなか難しいものでした。同時に、「東アジア」という枠組みではなく、〈北方ユーラシア〉と〈南方ユーラフロアジア〉のつながりの中で見ていくことを主張しました²³。多元的多重的な広がりを持つ中国は、まさにこれですね。〈中国史〉というのは、古い東洋史的な中国史、日本的な中国史の認識や感覚、あるいは、中華的なシステムが大きな壁になっていることを感じました。しかし、この当時、私の主張は、あまり受け止めてもらえませんでした。

1974 年に歴教協の世界部会で、「世界諸地域との出会い学習」というものを試みたことがありました。これは、世界各地域と自分がどう出会ったかを、参加者各自が語るという多元的世界像の学習であり、試行でした。お互いの経験と認識の交流ですね。とても面白いものでした。よく覚えているのは、参加者の皆さんが、〈鬼畜米英〉から始まっていたアメリカとの出会いを体験していたのに対して、前にも述べましたが、私はアメリカのお陰をこうむっており、戦争になっても、空襲で家が焼かれながれも、あまり敵意が起きていませんでした。それが敗戦後の体験の中から変化していくというアメリカとの出会いでした。〈ひっくり返し〉を続けた結果、現在の方が、あの時はひどいことをされたと感じています。

— その後、実教出版で再び編纂した世界史教科書について、教えてください。

1974 年から 78 年に、鈴木亮、大江一道、槐一男、二谷貞夫、鬼頭明成、石渡延男の各氏とともに、実教出版の『高校世界史²⁴』教科書の編纂を行ないました。地域世界それぞれの主体性を尊重し、地域世界を対等に扱うことで、ヨーロッパ中心主義の相対化を図った世界史教科書の初めての試みでした。ただし、13 地域世界では、いくらなんでも、検定には通るまいということで妥協して、9 地域世界に圧縮しました。こうして 9 地域世界対等の世界史をやってみました。研究も十分にはありませんでしたが、私も女性の活動や文化とか、民衆の動きとかを取り上げたり、興味深い挿絵などを選んだりしました。とにかくグローバルな世界

²¹ 「シンポジウム（その一）世界史の可能性」『季刊歴史教育研究』50 号、1969 年。

²² 吉田悟郎『歴史認識と世界史の論理』勁草書房、1970 年。同『歴史認識と世界史教育』青木書店、1970 年。

²³ 座談会「東アジアを考える」『歴史地理教育』214 号、1973 年。

²⁴ 吉田悟郎、鈴木亮、大江一道他『高校世界史』実教出版、1978 年検定。その後、『高校世界史改訂版』として 1983 年、1986 年に検定を受けている。

ができるまでを、9 地域で構成し、記述しました。ところが、予想通りでしたけれども、検定で落ちました。この前後のことは、鈴木亮氏が詳しく述べたものがあります²⁵。そのため再検定に間に合わせるために、無理をして、大航海、産業革命後の世界進出のところで、第三世界の方を主体にして書くとか、構成するとかして、出しました。ヨーロッパ中心の世界史構成、世界史叙述を相対化する、一つの良い試みでした。第三世界を主体として立ててみることは、規制の枠内ではとても難しく、また、スタッフの認識の未熟もあり、失敗に終わりました。

それから、〈足で歩く世界史学習〉を進めました。お金をかけて、外国に行かなくても、身近に中国や朝鮮、台湾、ヨーロッパ、アメリカがあったりします。そこで、地域を歩いて、世界史を見つけていく。そういうことを進めました²⁶。私がやった中では、ゾルゲについて読み直し、調べなおし、訪ねていったことが印象に残っています。これも一つの〈ひっくり返し〉ですね。また、地図はなぜ必要なのか、それなのに、なぜ使われていないのかを問題としました²⁷。私は、南北アメリカとユーラシアの 2 枚の大きなドイツ製の地図（ハーク社）を壁に貼るのが授業の基本でした。これは、歴史地図ではなくて、現在の地図です。このような地図の中で歴史を指摘し、語っていく。これが大事なことです。

ここで述べた以外にも、私が高校の歴史教育者として取り組んだ世界史については、その一部を『世界史の小径—世界史学習小論—』（実教出版、1977 年）や『世界史の方法』（青木書店、1983 年）にまとめてあります。また、1960 年代・70 年代の世界史教育をめぐる問題は、鈴木亮氏が整理されたものがあります²⁸。

9. 出版やラジオ・テレビでの歴史学習

— 吉田先生のテレビでの授業や多くの出版物も、「ものの見方」に関わる活動であったと存じますが、いかがでしょうか。

ラジオ放送や日本教育テレビ、NHK通信高校講座で、世界史の講座を担当することがありました。1953 年から、NHK ラジオ学校放送中学校「時の動き」を担当しました。要は、週一回の時事解説でしたが、解説室からおりてくる原稿を、私がアドリブでどんどん変えて喋っていました。それが見つかって、3 年目には交替させられました。また、日本教育テレビの試験放送で歴史番組をやるというので、吉岡力氏に話があって、私も加わりました。「埋もれた世界」とか、面白い番組を 6 回ほど放送しました。一つには、三笠宮に出演してもらいました。

もう一つ、担当したのは、NHK の教育テレビの通信高校講座「世界史 B²⁹」で

²⁵ 鈴木亮『大きなうそと小さなうそ—日本人の世界史認識—』ほるぷ出版、1984 年。

²⁶ 「〈足で歩く世界史学習〉のすすめ」『高校世界史指導書』実教出版、1978 年。「日本・ロシア・北方ユーラシア」『歴史地理教育』270・275・279 号、1977～1978 年。

²⁷ 「地図はなぜ必要なのか—それなのになぜ地図はあまり使われないのか」『歴史地理教育』254～255 号、1976 年。

²⁸ 歴史教育者協議会編『歴史教育五〇年のあゆみと課題』（未来社、1997 年）参照。

²⁹ 1960 年版高校学習指導要領の世界史と地理は、3 単位の A と 4 単位の B が設定されていた。内容に関して「世界史 B は、世界史 A の場合よりも深めて取り扱うもの」とされていた。

した。1965年の試験放送から始めて、本格的な放送になりますが、3年ほど、ずっと企画と構成と出演を担当していました。これは、私が好きなビジュアルの勉強でした。面白くて分かりやすく、見たこともないような色々な写真や絵をたくさん探して、それらを使って話を進めることに努めました。上原氏の案でベトナムの切手なども、ふんだんに使いました。アメリカ合衆国の領土拡大を見るのに、インディアン側の側、西部農民の側、メキシコの側、それぞれから示したり、日中戦争を中国の側からも見るために雑誌『中国』に掲載された話を活かしたり、色々なことをやりました。高校の授業でやったら、1時間では済まないものばかりでした。時々もらっていたテレビ放送のフィルムを、最近、卒業生がビデオ化してくれましたが、私はまだ見ていません（笑）。

図鑑、掛図や、学研のカラーのスライドなども作成しました。歴教協編『教師のための世界歴史』（河出書房、1955年）や『学習指導資料事典 社会科編』（平凡社、全10巻）などにも関わりました。後者は、沖縄を視野に入れつつ、安保の時期なので、これを最後の部分で取り上げています。また朝鮮のことを捉え始めています。

ネルーの『父が子に語る世界歴史³⁰』（原題：世界史瞥見）も重要な本です。成城の先輩で都立大にいらした大山聡氏が中学生向けに翻訳を頼まれたとのことで、私に声を掛けてくれました。読書会などで大いに勉強しました。ネルーは上流階級のインテリですけど、彼なりの生き方と努力の中で書いた、獄中から幼子にあてた手紙の世界史です。同時代の世界史です。この中で、ネルーは近代日本のことを痛烈に批判し、かつ敗北を予測していました。日露戦争での日本の勝利にネルーが感激したことがよく引用されますが、実際には、その後には日本の行く末を案じている部分があります。この部分を落とさずに、私が大山氏の訳をもとに中学生向けに編纂しました³¹。ネルーの本は、高校の世界史の授業で、長い間テキストとしました。ネルーの世界史は、一つの模範ですね³²。吉村徳蔵氏のこれを使ったよい実践報告³³がありますね。

それから、歴史教育に関わる絵本にも取り組みました。評論社から『コロンブスの航海³⁴』や『マゼランの航海³⁵』などを6冊、翻訳して出版しました。これら

³⁰ ジャワーハールラル・ネルー（大山聡訳）『父が子に語る世界歴史』みすず書房、全6巻、1959年。同書は、その後、2002～2003年（全8巻）に至るまで発行され続けている。

³¹ ジャワーハールラル・ネルー（大山聡・吉田悟郎共訳）『父が子に語る世界史物語』あかね書房、1961年。

³² 吉田悟郎「ネルー『世界史巡歴記』」、酒井忠雄編『歴史と教育—その原点は何か—』講談社、1981年（吉田悟郎『世界史の方法』〔青木書店、1983年〕に「ネルー『世界史』に世界史の方法を読む」として収録）。

³³ 吉村徳蔵『歴史教育のたのしみ』（日本書籍、1993年）に「ネルーの世界史を使つての授業」として収録されている。

³⁴ ピエロ・ベントゥーラ（絵）、ジアン・パオロ・チェゼラーニ（文）、吉田悟郎訳『コロンブスの航海』評論社、1979年。吉田悟郎「世界史の絵本を訳し終えて」『学校図書館』365号、1981年（吉田悟郎『自立と共生の世界史学』青木書店、1990年に収録）。

³⁵ ピエロ・ベントゥーラ（絵）、ジアン・パオロ・チェゼラーニ（文）、吉田悟郎訳『マゼランの航海』評論社、1981年。他に、マルコ・ポーロ、クック、リビングストーン、北極探検の絵本がある。

の本は、次第に歴史教育の実践にも利用されてきています。イタリア人による著作ですが、これは、個人の英雄史観として描かれたものではありません。また、探検され、発見され、征服された側の方を落とさずに描いています。アメリカでの英語訳は実に不十分で、この肝心なところを削っています。翻訳にあたっては、持っていった乾燥食料の名前なども、苦労して調べました。このような細かい部分を疎かにしてはいけなかったと考えました。そういえば、コロンブスについては、コロンブス・デイにその銅像を引き倒したという出来事が、数年前にありました。中南米の先住民族のサイトで知りましたが、近代化に対する問い直しとして、私は痛快的なショックを受けました。

10. 歴史教育の国際交流

— 吉田先生は歴史認識、歴史教育の国際交流についても尽力されていますが、その始まりからお聞かせください。

世界の歴史家、歴史教師との交流を始めました。はじまりは、1979年の第4回日ソ歴史家会議でした。ここで世界史の方法が取り上げられ、これを私と太田秀通氏とで発表をしました。この人選は、〈ちょっと変わっている世界史教師〉の吉田と〈オーソドックスな研究者〉の太田氏に発表させて、相手にぶつけるという意図であったようです。私は、〈上原世界史〉の考え方を中心に「日本における世界史の方法」として発表しました³⁶。このときは、報告内容が相手にうまく伝えられず、失敗でした³⁷。

次に、1980年のブカレストでの第15回国際歴史学会議の歴史教育部会において、高橋碩一氏の代役を仰せつかりました。このときは、みんなで作った教科書問題に関する日本の報告を代読しました。読めば2時間かかるものを、5分で発表するように言われ、自分なりに考えて報告しました。討論では、ソ連からの安易な国際共同計画が、こてんぱんに批判されました³⁸。1979年・80年の経験は、個人的にいい勉強になりました。第二世界が第一世界の鬼っ子であること、自国史と世界史の問題の難しさを痛感しました。

これらと並行して、パレスチナ・中東との出会いが始まります。1977年に日本で初めて開催することになった「パレスチナ問題を考えるシンポジウム」の準備に呼ばれました。委員にされまして、組織・企画から運営・報告まで参加しました。この中で、パレスチナ・中東の問題を、高校世界史でどのように考え始めているか

³⁶ YOSHIDA GORO “Methodology of World History in Japan 1945-1979”

³⁷ 吉田悟郎「第4回日ソ歴史学シンポジウムに参加して—「世界史の方法論」をめぐるいくつかの意見—」『歴史地理教育』301号、1980年。

³⁸ 吉田悟郎「第15回国際歴史学会議歴史教育部会報告 上・中・下」『歴史地理教育』317・318・322号、1980年。同「歴史教育の初の国際会議—吉田悟郎氏にきく—」『歴史教育研究』65号、1980年。なお、李元淳『韓国から見た日本の歴史教育』（青木書店、1994年、19・130頁）が、このときの吉田氏の報告に言及している。

を取り上げました³⁹。それから 1979 年に、日本・アラブ関係国際共同研究の「日本・アラブの相互認識に関する研究」にも参加しました⁴⁰。ここでは、教科書における中東理解を担当しました。その後、5 年間の学習と実践を経て、PLO 在日代表部のすすめもあり、世界史教師が研究者と共に、1982 年 11 月水道橋の日大法学部で、「パレスチナ・アラブ・中東を考えるシンポジウム」を企画開催できたことは、大変よい勉強になりました。私たちの中東イメージ、世界史の中のパレスチナ、私たちのユダヤ人イメージの 3 セッションで 2 日間やりました。

今ではほとんど頭に残っていないのですが、このころにアラビア語、ペルシア語、トルコ語、ヘブライ語、モンゴル語などの勉強もしました。また、1987 年には中近東文化センターで、「十字軍シンポジウム」が行なわれ、「歴史教育の中の十字軍」を報告しました。十字軍思想、十字軍運動は、湾岸戦争やイラク戦争を見ると、今まさに続いているものですね。

1983 年に、第 1 回日米歴史学会議が都立大学で行なわれました。ここで歴史教育の部会が開かれ、「日本におけるヨーロッパ史教育」の報告⁴¹を行ない、アメリカ側からの報告（マクニール氏）もあり、若干の意見交換がありました⁴²。このときの報告は、台湾の歴史家が訳してくれました⁴³。また、別の論文⁴⁴を、重慶の歴史家が「大学教育における世界認識⁴⁵」として訳してくれたこともありました。

— 比較史・比較歴史教育研究会は、これをきっかけに設立されたと伺っていますが。

日米の会議が終了した後も、勉強を続けていこうと、私が主張して、この会を〈でっちあげ〉ました（笑）。会則とか規約などはなく、年齢・性別・地位・学歴・職業・国籍・民族など一切問わない、つまり学術サークルにありがちなヒエラルキーなど誰も気にしない集まりです。韓国の友人は〈小さな学術的コミュニン（共同体）〉と評してくれました。この中から日中韓の交流を進めました。韓国からもすばらしい方々をお呼び出来ました。1984 年の第 1 回東アジア歴史教育シンポジ

³⁹ 吉田悟郎「日本社会のパレスチナ問題観—教育の面から—」（『パレスチナ問題を考える』シンポジウムの記録、1977 年 11 月 28～30 日、横浜国際会議場）。

⁴⁰ 板垣雄三・吉田悟郎編『パレスチナ人とユダヤ人—日本から中東をみる視点—』（三省堂、1984 年）参照。

⁴¹ 吉田悟郎「国史・西洋史・世界史」として比較史・比較歴史教育研究会編『自国史と世界史—歴史教育の国際化をもとめて—』（未来社、1985 年）に収められている。

⁴² 伊集院立・長沼宗昭「世界史のなかのヨーロッパ史—日米歴史学会議の討論から—」比較史・比較歴史教育研究会編『自国史と世界史—歴史教育の国際化をもとめて—』（未来社、1985 年）で紹介されている。

⁴³ 吉田悟郎（呉文星訳）「日本的西洋史教育」『史学評論』第 8 期、民国 73（1984）年。

⁴⁴ 吉田悟郎「世界史とはどういう学問か—世界史を自ら学ぶということ—」歴史教育者協議会編『世界に目を開く社会科』あゆみ出版、1985 年。

⁴⁵ 重慶市歴史学会・重慶師範大学歴史系編『重慶史学』1988 年 2 号、陳相武訳。本号では、「最近の日本における歴史教育の理論と実践」が特集されている。

ウムでは、私も気張って「世界史におけるアジア史」を報告しました⁴⁶。のちに、北朝鮮やベトナムからも呼ぶことも出来ました。5年に1回、4回のシンポジウムを開催してきました⁴⁷。研究会は現在でも続いています。ただし、シンポジウムは、お互いの問題意識の違いもあり、簡単に続けられない部分もありますね。

1 1. 都立高校退職後

— 退職された後の吉田先生の世界史への取り組みをお聞かせください。

1952年から29年間、勤めていた東京都立広尾高校を1981年3月に、定年より一年早く退職し、世界史教師を辞めました。ただ、その後も、ものの見方・考え方のあり方や世界史の方法、その〈ひっくり返し〉を繰り返してきました。

以前から行なっていた大学での非常勤講師は、高校退職後も続きました。なかでも、中央大学法学部の一般教育「史学」、成蹊大学法学部の教職「世界史概論」などは長く行ないました。教職課程では普通、「外国史」なんですけど、成蹊大は西洋史の別枝達夫氏が、外国史ではまずい、世界史であるべきだと主張されて、全国でも恐らく唯一だったと思いますが、教職の世界史という講座で始まりました。そして別枝氏が辞められた後に、私がその授業を担当しました。定年の75歳までやってくださいと言われて、1996年まで続けました。高校教師としても自由に話していましたが、大学では、気持ちの上で、さらに自由に色々なことを話すことができました。自分としてはそれほど進歩や発展ができなかったと思いますが、講義録のような形でまとめたのが、『世界史学講義』（上・下、御茶の水書房、1995年）です。これは、方法としての世界史学を互いに構築して勉強して行こうとしたものです⁴⁸。

1952年に高校の世界史教師になってから始めた、世界史という〈妙ちきりん〉な科目ですね。その背景に作らなければならない世界史学（この言葉には「？」が付きますが）、世界史の方法というものについて、十分かどうかはともかく、同志と共に、いつの間にか、否応なしに取り組み出していました。私は、1981年の高校退職から90年代にかけて、自分なりの考え、方法を、良し悪しは別にして、曲がりなりにも作ってきたと思います。そのことを上手くまとめて表現するのは難しいものです。自分の中にもともとあった唯物史観の克服、ということは大袈裟になりますけれども、より正確に言えば、自分の中の唯物史観的なものの〈ひっく

⁴⁶ 比較史・比較歴史教育研究会編『共同討議—日本・中国・韓国/自国史と世界史』ほるぷ出版、1985年。あわせて、同・前掲『自国史と世界史—歴史教育の国際化をもとめて—』がある。

⁴⁷ 1989年に第2回（比較史・比較歴史教育研究会編『アジアの「近代」と歴史教育—続・自国史と世界史—』未来社、1991年）、1994年に第3回（同『黒船と日清戦争—歴史認識をめぐる対話—』未来社、1996年）、1999年に第4回（同『帝国主義の時代と現在—東アジアの対話—』未来社、2002年）が開催された。

⁴⁸ 吉田氏の諸大学での授業に関しては、「高等学校教育課程改訂に思う—『社会科教育法』の教室から—」（『学校教育研究所年報』19号、1975年）、「ブナ林便り 92年度教職課程『世界史概論』前期を終えて学生に学んだこと」（『教職課程指導室年報』2号、成蹊大学、1998年）等がある。

り返し〉であったと感じています。この、自分の中の唯物史観的なものの外側あるいは根底には、小学校以来の読書や交友関係の中から出てきたものであり、日本の近代文学や、ドイツやロシアなどの西洋文学などから我々の世代の日本の知識人がある程度共通に持っていた人類文明史観のような、また平和史観のようなものが、存在したと思います。そういうものに対する、〈ひっくり返し〉であったと感じています。

このことは、なかなか整理しきれていませんが、1991年の「21世紀を臨む歴史教育における自国史と世界史—学と知転換の場としての世界史学—⁴⁹⁾」、1993年の「『世界史学』45年と世界史学⁵⁰⁾」、「産業革命・市民革命世界史⁵¹⁾」、「世界史像の再構築に向けて—近代化は何時何処で始められ、誰によって横取りされ、どう変質していったのか—⁵²⁾」、さらに、『民学としての世界史学への道程⁵³⁾』、私のホームページ（後述）に載せた「自分史略年譜」などの論文や報告で、産業革命や市民革命から見る世界史の見方の問題を始めとして、近現代史の基本的な見かたに対する私の〈ひっくり返し〉について述べてあります。一方で、批判も寄せられています。自国史と世界史への私の考え方に対して、歴史学の立場から、西川正雄氏は「かえって全体の座標軸が見失われる危惧を感じさせる」という批判をしています⁵⁴⁾。

— これらは、すべて、〈ひっくり返し〉の問題ですか。

ええ、そうです。もっと分かりやすいのは、「歴史教育の中の十字軍⁵⁵⁾」です。これは、前にもお話しましたように、1987年に中近東文化センターで行なわれた十字軍シンポジウムの中で報告したものです。ここでは、従来の十字軍史の捉え方のひっくり返しをしています。このことは近代西洋中心史観の〈ひっくり返し〉にもなりますし、唯物史観の〈ひっくり返し〉にもなるわけです。自分自身あまり言い切っていませんが、ヨーロッパ中世の十字軍とその思想は、その後も継承されて今日でも生きています。マッカーサーは天皇に聖書を持たせようとしたことが、まさに十字軍思想です。さらにイラク戦争でも、アメリカ合衆国の政権の言動にも、十字軍思想がはっきりと現われています。日本のメディアをはじめ、十字軍を、このようなものとして全体的に十分に捉えきっていないと思います。

⁴⁹⁾ 1991年日韓歴史教育セミナー基調報告。西川正雄編著『自国史を越えた歴史教育』（三省堂、1992年）所収。

⁵⁰⁾ 1993年歴史教育研究所研究会報告。石山久男・渡辺賢二編『展望日本歴史2 歴史教育の現在』（東京堂出版、2000年）所収。

⁵¹⁾ 歴史教育者協議会編『あたらしい歴史教育1 世界史とは何か』（大月書店、1993年）所収。

⁵²⁾ 中国歴史教学研究会1993年年会（北京）での報告。

⁵³⁾ 未刊（1996年2月4日現在の自家製資料集。28篇）。

⁵⁴⁾ 西川正雄「自国史と世界史」『現代史の読みかた』平凡社、1997年。

⁵⁵⁾ 『中近東文化センター研究会報告9 十字軍』（中近東文化センター、1988年）所収。

— 吉田先生が十字軍についてお書きになったときに、一番触発された文献は何かですか。上原専禄氏のものでしょうか。

上原氏は、まだ手をつけ始めたところだったと思います。何だったでしょうね。一番触発されたものといえば、ネルーの『世界史瞥見』（父が子に語る世界歴史）であったと思います。私が述べたような十字軍の捉え方は、形としては先駆的に行なっていましたが、しかし第三世界の人々にとっては、当時から常識的なものであったはずです。けれども日本では、西洋史学者もこのような捉え方はしていませんでした。世界史教育でも、私たちが作って、すでに絶版になっている『高校世界史』（実教出版）の十字軍記述などにおいて、このような捉え方を出しかけましたが、西洋部分の執筆担当者であった大江一道氏の考え方もあって、全部について貫くことはできていませんでした。今も「十字軍」という言葉は、非常に安易に西洋史的に使われていることが多いですね。

また、この続きのようなものとして、「戦後史」という捉え方の問題点を主張しました。戦前と断絶した、平和な「戦後史」という枠組みの概念について、正面から強烈に批判していたのは、ひとり、板垣雄三氏のみでした。「戦後史」というのは、真っ赤な嘘で、実は〈戦中〉史がその後も続いていたのです。私も歴教協などで主張しましたが⁵⁶、残念ながら、あまり効き目はなかったですね。

関連して、1980年代後半から、民族・国家イデオロギーの歴史性を抉り出して、それらの〈ひっくり返し〉を進めてきました。自国史と世界史の課題の中には、西欧近代文明の内在的な批判、各国の具体的条件とそれぞれの民族的課題に基づく世界の歴史教科書の検討と比較、日本史・東洋史・西洋史の3つの史学に共通する〈日本・日本人・日本史イデオロギー〉つまり国民国家意識に帝国意識が加わった意識の克服などが、なだれ込んでいます。

— 〈日本・日本人・日本史イデオロギー〉という言葉はどなたが使われたものですか。

これは、板垣雄三氏ですね。私も、ちょうど同じようなことを感じていました。とても根深く、まだ共通の問題になっていないのではないかと思います。かねがね、生徒や学生の書いたものにぶつかる中で感じてきました。歴教協もそうです。簡単な批判や、簡単な抜け出し方では、とても抜け出せないと分かってきました。国民国家意識であり、帝国意識でもあり、植民地保有者意識でも、大国意識でもあり、色々あります。あるいは、裏返しとしての外国史という捉え方にもつながってきます。

— 自国史と世界史の課題というのは、突き詰めれば、統一的把握の問題でしょうか。

⁵⁶ 吉田悟郎「偽史の枠組としての『戦後史』」『歴史地理教育』559号、1997年。

上原氏は統一的把握といいます、我々の中では統一的把握とは、簡単には言えません。そのように言えば、一つになって、イデオロギー性が出てしまいます。簡単にできることではありませんから、私もなるべく言いません。まず自国史と世界史が関連しあっているのだということをお互いに感じ合う、目を開き合う、論じ合うということが大事です。結びつくのだということを急がないことです。実証的なものも不足しており、我々にはまだ力がなく、つかめていません。ですから、どこか特定の場所だけでできたものではないという目の開き方が大事であって、すぐに、どこかと結びつけてしまつては、西洋中心史観の裏返しです、教科書世界史の裏返しです。

その後、1985年から95年にかけて、静岡県裾野市の十里木山荘で、10年間の山暮らしを続ける中で、以上のようなものを含めた色々なものを、ワープロで書いてきました。これらをまとめたのが、『自立と共生の世界史学—自国史と世界史—』（青木書店、1990年）や、先に触れた『世界史学講義』です。1980年代・90年代に、このように自分の中にあるものの見方・考え方などの〈ひっくり返し〉を、自分の力なりにやり終えたと当時は思いました。しかし、やり始めるとまだまだ続くことになります。

12. ホームページのこと

— 今、吉田先生が取り組まれているホームページについて、お話しください。

2000年1月に病気で亡くなった学友・鈴木亮氏が、「世界史教育の50年⁵⁷⁾」というホームページを、病におかされながらも、執筆し続けていました。その鈴木氏の頑張りに刺激を受けまして、自分もパソコンを始めるべきであると考えました。家内がパソコンを買ってくれましたので、2000年の末から勉強を始め、2001年3月から「ブナ林便り⁵⁸⁾」というホームページを立ち上げました。

ホームページの立ち上げに際して、次のような呼びかけの文を掲げました。

「1952年のことでした。社会科世界史教師になったとき、＜アジアの叢の中から＞世界史をとらえよう、自分に巣くう帝国意識・植民地保有者意識をどうにかして克服して自立と共生を支える世界史認識をうみだしていきたい、そう意気込みました。それから、日本ではじめての世界史教育と世界史研究はもう五十年以上の歴史をあゆんできましたが、私たちの世界感覚・世界意識、そして世界史感覚・世界史意識は形成され、成長してきたといえるでしょうか。おおいに疑い自戒する現状です。しかし、私たちは1982年来、比較史・比較歴史教育研究会という小さな会をつくり、1983年の日米歴史学会議の歴史教育部会での＜日米におけるヨーロッパ史教育＞の対話を皮切りに、1984年の第一回東アジア歴史教育シンポジウム以来五年おきに近隣東アジア諸国の歴史家・歴史教育者を招いて東アジア歴史教育シンポジウムを開き、＜自国史と世界史＞を共通課題

⁵⁷⁾ 鈴木亮「世界史教育の50年」<http://home.att.ne.jp/wave/natsu/ryo/50nen.html> (1998年10月1日公開、1999年10月16日最終更新)。なお鈴木亮氏は2000年1月5日に亡くなられた。

⁵⁸⁾ 吉田悟郎「ブナ林便り」<http://members.jcom.home.ne.jp/pinuskoraie/> (2001年4月公開)。

に掲げ、東アジアの対話を試みてきました。この共同の学習と運動を通じて、国家や民族、そして階級にも囚われないー自国・自民族中心主義ではないーそういう世界史認識・世界史像を互いに試行し始める、そんな時代が開けつつあるという思いをようやくもてるようになりました。当面、私自身は、国家や民族、階級に囚われ縛られた既存の〈世界史・全体史〉を、西洋主義・近代主義で化石化した従来の〈世界史〉をひっくり返して、自由闊達で多種多様多元多層の、相互の〈自立と共生〉を支えるような、未知の世界史の大海原へ漕ぎ出ていこうと夢見ています。(01.3.25)」

この中の「東アジア」という言葉は、現在しきりに使われて、共通項や共通意識を探る対話が進められていますが、私は、逆に差異性をはっきり認識しあうことが大事だと考えています。また「階級にも囚われない」という言葉は、人によっては気に触るかと思います。階級を否定しているわけではなく、歴史教育の中での階級がいかに簡単なものではないかを、私は追求してきました。

ホームページは、自分が書き溜めた文を中心にして、始めました。「東アジア史への試み」として、多くのものを書きました。その中の「朝鮮五葉松への旅」は、序から韓国・北朝鮮編、ロシア・極東編、中国東北編、日本編、結びまで、A5版で300～400ページほどになります。挿絵も入れて読めるようにしました。「世界史瞥見」という部分では、自分の文に加えて、日本国内や世界中の仲間たちの意見や報告を見られるようにしました。今日、いらしている三王昌代さんの文章もここで紹介しています。私も、色々な面白いものを書き加えたいと考えていますが、なかなか、その暇がなくて、できないでいます。

そして、「毎日更新」のページがあります。ホームページ開設後、2001年に9・11の事件が起こります。私は、その後の事態を見て、これは、ものを言い、伝えなければならないと感じ、毎日更新にならざるを得なくなってしまいました。当初はメールで20人ほどの仲間に送っていました。すると、1日に10通も来ると言って、悲鳴をあげる人が出てきました。そこで見る人が見られるようにと、ホームページにしました。

「毎日更新ブナ林便り」のはじめに、「僻地・マイノリティの視点から、この乱世世界史の日々を瞥見する試み」と掲げました。この中の「僻地」は「辺境」にしようかと迷いました。また「乱世世界史」とは、今の世界史は戦国乱世であるというソウルでの私の基調講演での言葉です。「瞥見」は、ネルーの『世界史瞥見』から取りました。

ここに風刺の漫画やアニメを取り上げた「漫画は剣よりも愉^{たの}し」という欄を載せています。「中東をはじめ第三世界の人の心と思いと目に開くひとつの糸口として」という言葉を添えました。教育の問題、国民の学習の問題ですけれども、中東をはじめ第三世界の人の心と思いと目に開かれていません。そこで目を開くための一つの試みが、これです。サウジアラビアのアラブニュースやカタールのアルジャジーラ、イラン、アメリカ、中南米その他、世界中のネットから、アニメや漫画を拾い出して、訳して紹介します。この作業で半分、仕事が終わってしま

います。漫画は実にさまざまなことを表わしていますね。アラブの漫画を見ると、民衆や支配者を描いて当然というところがあります。これが日本やアメリカとは違いますね。彼らは自分たちの世界を痛烈に批判します。これは魯迅に通ずる世界だと思います。私はショックを受けました。自分のホームページで一番大事なところは、漫画の部分ですね⁵⁹。愛読者のひとりの方が、日本の狂言を思わせると教えてくれました。

それから「日々是抵抗」という欄があります。この中で「速報」も毎日更新しています。最近はいラク情勢を中心に世界中での運動や取り組みを拾い上げています。表のメディアで言われていることと違う情報もたくさんあります。そして、次に「今世界史の野蛮化・地獄化に日々抵抗している前衛として、そして別の平和・独立・共存の世界を創ろうと苦闘している前線として」と掲げた欄があります。さらに、パレスチナ・イラク・アフガンをはじめ、アラブ、〈帝国〉アメリカを含めた世界中の人々の声を拾っています。「もう一つの世界は可能だ」として、多元で多様な地域・世界を追求する運動が進められていますが、これにも注目しています。最後に「日々更新サイト」では、色々な人々の意見や情報を紹介しています。結局、〈世界史の大海原〉に出て行くというのが、毎日の作業になっています。

— 膨大な量のホームページですが、毎日更新ということになると、1日にどのくらいの時間をかけて作業なさっているのですか。また、ホームページへの感想や反響はいかがですか。

1日にざっと、10時間くらいです。〈世界史〉は休むことがありませんから、私も土曜・日曜も休めません。以前、家内に休むように言われましたけど、小さい記事やあまり人が読まない雑誌、このようなものが大事ですから、相当、注意して読んでいかないとだめですね。

掲示板は、特に設けていませんが、各自のホームページで紹介されたり、メールで情報や感想をもらったりすることはあります。その中で、「情報の海」と評する方も、また、レファレンス範囲の広さと選択などの「編集力」を「讃仰」してくださる方もいます。歴史は、こんなにも面白いものだったのかという感想をくれた方もいます。〈今日の世界を見る格好の窓口〉という評価も頂きました。インターネットを通じて、色々な知人が世界中に増えました。

私自身は、〈世界史の一つの見本、試案〉、〈『日本国民の世界史』の増補ページ、アップデート、生きた問題集・例題集〉と考えて、日々、綴っています。ここでは、私は、現場の世界史教育者でもあり、現場の世界史学習者でもあり、そして現場の世界史研究者でもあります。

13. 世界史教育の課題と今後の取り組み

— 吉田先生がお考えになっている世界史、世界史教育の課題と、ご自身の今後の取り組みについてお聞かせください。

⁵⁹ 吉田悟郎「世界の無視と沈黙に向かいアラブの漫画は訴える」『歴史地理教育』696号、2006年。

三木亘氏が「第一ラウンドは終わったか」という文を書いています。この中で、世界史は文明の段階から野蛮の段階に入っている、まさに野蛮化・地獄化の末期的な時期に入っていると述べています⁶⁰。端的に言えば、世界史、人類史は、民主化、自由化、近代化、進歩発展ではなく、野蛮化し、地獄化してきたということです。この意味で、日米戦争で体験した本土への無差別爆撃、ナパーム弾、沖縄や硫黄島の地上戦、ヒロシマ・ナガサキの原爆は、世界史の〈終わりの始まり〉ではなかったかと感じます。どこかで打ち止めにすべきものです。しかし、現在、この野蛮化・地獄化を日々、体験しているのがパレスチナやイラク、アフガンなどの人たちだと思います。それを実行しているのがイスラエルであり、アメリカであり、加担しているのが日本の政権だと思います。そう考えると世界史の授業は遠くの存在になってしまいます。

学習指導要領の世界史にせよ、教科としての世界史にせよ、教育実践の世界史にせよ、まだ、進歩・発展史観が破れていません。前にもお話したコロンブスですが、大航海から世界の野蛮化が始まっていたのを、日本ではグローバリズムのあまりにも良い点だけを見てきました。悪かった点を主張する人が第三世界にいても、そのことを気にしない体質があります。それはなぜなのか、どこから来たものなのか、たとえば、日本が近代史・現代史の優等生であり、戦争に負けても復興し、再建したのが、うまく行っちゃっているからです。優等生に慣れたものだからと、逆に甘んじてはだめですね。日本のメディアも、報道の主流として本質を知らせていませんし、また、受け手も知っても仕方がないと思っている面もあります。1945年後も戦争は、朝鮮戦争、ベトナム戦争、そして現在まで続いています。戦争を知らないというのは嘘であって、戦争を知らせてこなかったわけですし、戦争はなかったと自国中心に思い込んでしまっただけです。戦争や核のもとに立って、アメリカの属国のようになっているのにです。以前は、おじいさんがアメリカに負けたのだから仕方がないという言い方や雰囲気もありましたが、最近はこのようなものすら感じなくなっています。これは危機ですね。

イスラエルが壁を作って隔離政策を進めているのは、ご存知の通りです。この壁は目に見える壁ですが、実は我々の中にも、目に見えない、世界と歴史を見えなくさせている、このような壁があるのではないかと気づきました。ただ、これらに対する〈ひっくり返し〉というのは、始終、注意していないとだめなもので、固定化し、老化し、化石化してしまうものです。〈ひっくり返し〉は、自分ひとりで出来るものではありません。

世界史の授業については、こういうことができないかと考えます。教科書を離れて、参考書があるならそれを使う、身近に、地域に、さらに日本、アジア、ヨーロッパの中にも、差異性、多様性があることを勉強して目を開き、知り、知らせ、見せる。世の中に色々な値打ちを持った人、価値ある仕事があり、生き方がある。これらが何かつながっている。このようなことが私は〈忘れ残し〉になると思います。これに近いことを部分的に行なっている人は、歴史の授業でなくて

⁶⁰ 三木亘『世界史の第二ラウンドは可能か：イスラム世界の視点から』平凡社、1998年。

も、いると思います。そのためには、まとまった教科書世界史から一応、離れなければだめですね。もちろん無視する姿勢を子どもに見せてはいけませんが、教科書は脇に置いておいて、時々、面白いこと、いいことを授業でやる。我々はつながっている、そのつながりの中で世界、我々は生きているということをですね。綴り方とか、かつての社会科には、このような授業があったと思います。また、中央ではなくて、地域から自覚して起こしていくべきです。中央では教えられない、中央にはないようなことを、地域で掘り起こして、その価値を感じあう。題材は何でもいいのです。そして地域は、他の地域とだけではなく、日本全体や世界とつながっていることを、我々が勉強して掘り起こし、一緒になって掘り起こして、それを感じあっていく。こういうのが一つでもあれば、それはすごい〈忘れ残し〉です。地域から、地方から日本が変わっていきますね。ですから、全国に教師がいる限り、できることだと思います。

私は 60 年たっても、世界史というものが教科として、教科書として、可能性をあまり感じないのです。ある意味で、絶望に近い状態で続いていると思っています。だけれども、絶望に近い状態に甘んじてられない。だから、自分自身に一生懸命言い聞かせ、呼び聞かせて、今は「ブナ林便り」のホームページを続けています。この世界史を毎日描こうとする中で、〈ひっくり返し〉の必要を自覚し、継続していますが、正直に言って、手探りです。『日本国民の世界史』の執筆者の 7 人で、生き残っているのが私だけであること、これが今の自分の活動に大に関係しています。受動的で、自然的な世界史ではなくて、主体的に、機動的に現在の世界史に立ち向かうというのは大変なことです。私は、この『日本国民の世界史』を日々、更新しています。

— 長い時間、お話をお聞かせくださいまして、本当にありがとうございました。

後記

今回のインタビューは、聞き手の不勉強により、2 年越し 3 回にわたってお話を伺うこととなった。さらに、お話を伺った後に、2 年近くのお時間を頂く結果となった。まず、このことを深くお詫び申し上げる。

インタビューでは、多くのご自身の著作や、戦争中からの様々な記録などをお持ちいただき、分かりやすく解説をしてくださった。しかしながら、吉田先生の長年にわたる歴史学習、世界史・世界史教育への主張と活動を伺うことは、すなわち、1920 年代から現在までの日本社会と世界情勢を学ぶことを意味していた。3 度にわたりお話を伺った上に、さらに、終了後に録音されたテープで何回か聞き直して、初めて意味が分かったことも多かった。また、お話いただいた内容のす

べてを、記録の中に残せなかったことも恥じ入るばかりである。

原稿校正の段階でお寄せ頂いたお便りを、お許しを得て、以下に掲載させて頂くことで、吉田先生のその後のご活動の紹介に代えたい。

2006年6月から8月にかけて、いままで気づかず放置していた大腸内部の癌を東京女子医大の病院で見つけていただき、転移・合併症なく、癌を3つ除去する手術に成功、無事帰宅しました。この間、いままで無知無関心で済ませてきた身体のこと、医学、外科手術と医療・看護の進歩などについても実地でのよい学習ができました。

そういう事情で、ライフワークの毎日更新<ブナ林便り>も一時休刊を発表しました。しかし、8月20日退院後、体調回復と共に、日増しに深まる乱世世界史瞥見への思いがくすぶり、結局、8月26日からすこし圧縮した形で、毎日更新ではなく、五日に一回ぐらいの頻度で、ブナ林便りを再刊することにいたしました。この間、山口市の歴史教育者・谷本育紀氏がブナ林便りのアラブ漫画を生かしてくだされ、山口市で「漫画が語るイラク戦争展」を企画開催されたことも大きな元気付けになりました。

21世紀の06年、いま世界・世界史は<裏返し>を始めています。16世紀以来の西方・北方中心の世界史、またそれを歴史化した（原始）古代・中世・（近世）近代・現代という文明発展史が崩れつつあります。米欧そして米欧化・近代化の優等生日本中心の世界史、米欧白人が文明や人権の伝道者として何の疑問ももたれなかった世界史——そして実はそれこそが官製・国定の教科世界史、いわゆる暗記世界史のよりどころでしたが——それがいま終わりを告げつつあります。

西方にかわって東（中国やインドなどアジア諸地域）が、北にかわって南（中南米・アフリカ）が、いま台頭し、自らの主体性と価値を蘇らせつつあります。アフガニスタンの苦闘、イラクの荒廃と混沌、パレスチナの地獄化とレジスタンスが、今この大過渡期の陣痛の苦しみを背負いつつあります。そのなかには辺境ネパールの革命や新生中南米の厳しい試行錯誤もあります。

マスメディアやアカデミズムは、このような世界・世界史の裏返し、既存の第一世界にとっては悪夢のような来るべき東西逆転・南北転倒には、当然、目をつぶり、耳を閉ざし、自らの地位と権威を、守ることに、汲々としています。

歴史教育者・歴史研究者は、ささやかな営みであっても、東や南の第三世界に目を開き、耳をそばたて、世界・世界史裏返りの陣痛の苦しみを一手に引き受けた第三世界の人々の生き様・喜怒哀楽、彼らの叫び、訴えに、心を開いてゆきましょう。

なお、毎日更新ブナ林便り（2004年10月16日以降に限り）および、再刊後の随時更新ブナ林便りは、凍結したブナ林便り全体とともに、<吉田悟郎アーカイヴ>に収録されています。（<http://rootless.org/goloh/>）

2006年10月13日 吉田悟郎

最後に、お忙しい中を非常に長時間にわたり、お話をお聞かせくださった吉田悟郎先生に心から感謝申し上げます。

（注記に関して、多くの文献やホームページの情報を利用させて頂きましたことを申し添えます。）
（文責：茨木智志）